



アルトドルファーと人文主義—聖母像と風景画を中心に

藪田, 淳子

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2019-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7361号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007361>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

アルトドルファーと人文主義—聖母像と風景画を中心に

氏名 : 藪田淳子

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程社会動態専攻

指導教員氏名 (主) 宮下 規久朗 教授
(副) 増記 隆介 准教授
(副) 増本 浩子 教授

(注) 4, 000字程度(日本語による)。必ずページを付けること。

ドイツの画家アルブレヒト・アルトドルファー(1480頃—1538年)は、西洋で初めて純粋な風景画を描いた人物として知られている。また近年、誇張した形態や色彩など、その表現主義的な特徴が注目されている。しかし一次資料の不足から画業には不明な点が多く、デューラーやクラーナハといった同時代を代表する画家たちと比べると、個別の作品研究が進んでいないのが現状である。

アルトドルファーの初期の研究は、1900年頃のドナウ派への着目をきっかけに始められ、風景画に見られる色彩や明暗表現が特徴的な画家として言及されてきた。その後はナショナリズムの高まりから、ドナウ派の画家としての側面に偏って研究が進められている。1960年代以降、ヴァイツィンガーはアルトドルファーの本格的なカタログ・レゾネを初めて出版し、作品の基本情報や文書の整理がなされるなど、以降のアルトドルファー研究における基本文献となっている。

1990年代以降、アルトドルファー研究に関する重要な研究書が立て続けに出版されるようになる。ウッドは、それまでドナウ派の枠組みで語られることの多かったアルトドルファーの風景画を、ドイツ愛国主義の観点から読み解いている。プスハルトはアルトドルファーの宗教画の多面性を、芸術家の特性ではなく、16世紀における神学とビルトの問題に着目することで、一般化して論じる。ノルはアルトドルファーの宗教画を、中世後期の神学と信仰心から全般的に分析している。また近年はアルトドルファーに関するシンポジウムや展覧会が開催され、時代性や、「ドイツ・ルネサンス」における役割といった観点から、従来のアルトドルファー像の刷新が試みられている。

これまでの研究では、アルトドルファー作品の人文主義的要素に注目されるようになったものの、個別の作品と関連付けて本格的に分析されてきたとは言い難い。しかしアルトドルファーの時代において、「ドイツの共属意識」の反映は重要な要素であり、そのような意識の担い手となったドイツ人文主義者は、アルトドルファーの作品制作における助言者となったと考えられるのである。

人文主義が興隆した16世紀はじめの神聖ローマ帝国は、諸侯の分裂や、聖職者の権力の増大によって、政治的に不安定な立場にあった。このような状況を憂いた人文主義者らは、帝国が一致団結し、他国に対抗できるような国家体制や、新しい信仰のあり方を模索する。たとえばこの時代を代表する人文主義者コンラート・ツェルティスは、主著『恋愛四書』の出版によって、帝国内の知的サークルにおける愛国主義の醸成を促している。神学においては、聖ヒエロニムスのような聖人像が、現代の人々が倣うべき信仰の模範として称えられ、人文主義者らの崇敬を集めている。またとりわけ彼らは聖母信仰に厚く、聖母を称えるラテン語の詩文を多く出版した。

筆者は、このようなドイツにおける愛国主義の興隆と、アルトドルファーによる新しい聖母像、風景作品の制作は密接に関わっていると考え、そのため本論文では、画家の聖母像と風景画を中心に考察し、アルトドルファー作品には一貫して人文主義者の思想が反映されていたことを明らかにした。

本論文第一章ではアルトドルファーの経歴を概観している。まず画家の主要な作品をまとめ、生涯の活動の地レーゲンスブルクでの社会的地位の確立について言及した。またアルトドルファーの様式の確立に影響を与えたと考えられる、クラーナハとの関係に着目している。さらに画家の、神聖ローマ帝国のための国家称揚事業への参加にともなう、人文主義者との人脈形成について推測した。

第2章では、画家の初期の作品《エジプト逃避途上の休息》(1510年)にみられるドイツ人文主義の影響を、エジプト逃避の主題には珍しい異教的な泉の描写の意味を検討することで明らかにした。聖母図像に伝統的に見られる泉のモチーフや、聖書外伝にあるエジプト逃避主題が、独特の描かれ方をした背景について、具体的に分析している。

第3章では、アルトドルファー作品には珍しく注文主が判明している《二人のヨハネ》(1507年頃)について考察している。聖母像とは異なるが、画家の作品の受容者を考える上で重要であるため検討の対象とした。本作はレーゲンスブルクの法律家のエピタフとして制作され、初期の作品としては規模が大きく重要な作品に位置づけられる。そこで「二人のヨハネ」の図像の特異性に言及し、本作が掛けられていた聖エマム修道院が人文主義の中心地であったことから、人文主義的な解釈に基づく描写がされていた可能性を指摘した。

第4章では、ドイツで熱狂的な巡礼者を集めることとなった、アルトドルファーの《シェーネ・マリア》(1519年)について分析した。「聖ルカの聖母」を模した《シェーネ・マリア》は、聖像批判が高まる中で制作された特異な聖母像であった。そのような聖母像が制作された背景として、1500年頃の信仰と聖像のあり方と、人文主義者による聖母崇敬との関係に着目した。

第5章では、アルトドルファーの宗教画における樹木の意味を、神学的・人文主義的背景から考察している。1500年頃のドイツで独特の樹木が描かれた要因を、ツェルティスを中心とした人文主義の興隆や愛国心の高まりから分析した。

第6章では、1520年頃から制作されている、アルトドルファーの風景画に込められた寓意的な意味について検討している。15世紀のヴェネツィア派にみられる寓意的な風景表現がドイツに取り入れられている事例や、ハンス・ザックスの書にみられる自然物の描写から、16世紀の「純粋な風景画」が成立するに至った過程を辿った。

本論文での考察の結果、第2章では、《エジプト逃避途上の休息》の泉には、ドイツの人文主義者が理解し得た「美德」を理解するためのモットーの意味があり、本作でアルトドルファーは、画家としての自意識を表し、人文主義的教養を披歴することを意図していたことが推測された。ツェルティスはドイツの主要な都市に人文主義ネットワークを形成していたが、彼の思想はレーゲンスブルクでも浸透していたと考えられ、《エジプト逃避途上の休息》制作に際しては、レーゲンスブルクの人文主義者がアルトドルファーに助言を行っていた可能性を指摘した。

第3章では、《二人のヨハネ》が設置されていた聖エマム修道院の人文主義の中心地としての重要性に着目し、同作品の図像プログラムには人文主義的要素が含まれることを分析した。また《二人のヨハネ》の図像解釈に関わる、作品と対になっていたエピタフの設置場所を同定した。最後の注文主であるトラボルトと人文主義との関わりに言及し、本作が従来のエピタフやエピタフ画とは異なる、人文主義者特有の思想が反映されたものであることを明らかにした。

第4章では、アルトドルファーによる、顕現する《シェーネ・マリア》が、聖像批判が高まりつつあるドイツにおいて、批判的な勢力に対抗する存在として制作されたことが分析された。人文主義者らは帝国の国家事業において、「古代風の枠」に顕現する皇帝や、キリスト像を版画で制作させている。実際の帝国は政治的に不安定な状態にあったが、ドイツ国内の分裂状態を危惧した人文主義

者らが、新しい聖人像を構想していた。「古代風の枠」に顕現する「聖ルカの聖母」は、そのような新しい信仰を創出するための試みであったと分析した。

第5章では、ツェルティスの『恋愛四書』が、ドイツの宗教画における風景描写発展のきっかけとなった可能性に言及した。同書では、自然と神の結びつきを、ドイツの風景の記述や挿絵によって具体的に表している。ドイツの宗教画においてよく描かれたのは、古代ゲルマン人にとつての聖樹であるオークと、当時キリスト教と結びつけられやすかったモミの木であることが分析された。このような樹木は、野人や聖人像とともに表され、救済や正しい信心の象徴として捉えられた。また聖母信仰の高まりによって、ドイツでは樹木と聖母の図像が流行している。「ドイツ的」自然を神の意志の表れと捉えるツェルティスの思想は、その後のドイツ人文主義者らに受け継がれ、樹木がドイツ人の象徴として強調されるようになった。

第6章では、ドイツの宗教画で表された樹木のイメージが、宗教改革をきっかけとして作品の主題として独立して描かれるようになったことで、アルトドルファーの風景画成立に至ったことを分析した。またアルトドルファーやフーバーの風景作品の分析から、「野生的な」樹木表現は、ドイツ的な風景に汎神論的な意味を見いだした。ツェルティスの思想の影響を受けた人文主義者らに需要があったことを推察した。また宗教改革後もツェルティスの後継者によって、帝国におけるドイツ的共属意識を表すモチーフとして、ドイツの自然観が引き継がれた点に言及した。アルトドルファーの《エジプト逃避途上の休息》から《イツスの戦い》に至るまで、ドイツ的自然が神意の表れとして捉えられ、次第に風景を捉える視点が、より宇宙的な、神に近い視点で表されるようになることを明らかにした。

本論文によって、アルトドルファーは、レーゲンスブルクやインゴルシュタット、ウィーンの知的サークルを通じて、生涯において人文主義的思想と密接に関わり、制作活動に反映していたことが推察された。アルトドルファーの描く異教的モチーフや「ドイツ的」風景が描かれた聖母像、また、ドイツ特有の樹木が表された宗教画や風景画には、ドイツにおける人文主義の発展と、愛国主義の高まりが反映されていたことを結論付けた。

論文審査の結果の要旨

氏名	藪田 淳子
論文題目	アルトドルファーと人文主義—聖母像と風景画を中心に
要 旨	
<p>本論文は、西洋で初めて純粋な風景画を描いた人物として知られているドイツの画家アルブレヒト・アルトドルファーの作品について、主に16世紀ドイツの人文主義との関係から考察したものである。この画家については一次資料の不足から画業には不明な点が多く、デューラーやクラナハといった同時代を代表する画家たちと比べると、個別の作品研究が進んでいなかった。しかし、1990年代以降、研究が進展し、重要な研究書が多く出版されるようになった。ノル、ブスハルト、ウッドらによる一連の研究によって、アルトドルファー作品の人文主義的要素に注目されるようになったものの、個別の作品と関連付けて本格的に分析されてきたとは言い難い。</p> <p>16世紀の宗教改革の前後にまたがるアルトドルファーの活動した時代において、「ドイツの共属意識」の反映は重要な要素であり、そのような意識の担い手となったドイツ人文主義者たちは、アルトドルファーの作品制作における助言者となったと考えられる。人文主義が興隆した16世紀はじめの神聖ローマ帝国は、諸侯の分裂や、聖職者の権力の増大によって、政治的に不安定な立場にあった。このような状況を憂いた人文主義者らは、帝国が一致団結し、他国に対抗できるような国家体制や、新しい信仰のあり方を模索する。この時代を代表する人文主義者コンラート・ツェルティスは、主著『恋愛四書』の出版によって、帝国内の知的サークルにおける愛国主義の醸成を促した。</p> <p>本論文は、このようなドイツにおける愛国主義の興隆と、アルトドルファーによる新しい聖母像、さらに風景作品の制作が密接に関わっていることを論証し、画家の聖母像と風景画を中心に、アルトドルファー作品には一貫して人文主義者の思想が反映されていたことを明らかにしたものである。</p> <p>第1章ではアルトドルファーの経歴を概観している。まず画家の主要な作品をまとめ、生涯の活動の地レーゲンスブルクでの社会的地位の確立について言及している。またアルトドルファーの様式の確立に影響を与えたと考えられる、クラナハとの関係に着目している。さらに画家の、神聖ローマ帝国のための国家称揚事業への参加にともなう、人文主義者との人脈形成について考察している。</p> <p>第2章では、初期の宗教画《エジプト逃避途上の休息》を分析する。この作品に描かれた特徴的な泉には、ドイツの人文主義者が理解し得た「美德」を理解するためのモットーの意味があり、本作でアルトドルファーは、画家としての自意識を表し、人文主義的教養を披歴することを意図していたとした。ツェルティスはドイツの主要な都市に人文主義ネットワークを形成していたが、彼の思想はレーゲンスブルクでも浸透していたと考えられ、《エジプト逃避途上の休息》制作に際しては、レーゲンスブルクの人文主義者がアルトドルファーに助言を行っていた可能性を指摘した。</p> <p>第3章では、アルトドルファー作品には珍しく注文主が判明している《二人のヨハネ》について、それが設置されていた聖エメラム修道院の人文主義の中心地としての重要性に着目し、同作品の図像プログラムには人文主義的要素が含まれることを分析した。また《二人のヨハネ》の図像解釈に関わる、作品と対になっていたエビタフの設置場所を同定した。最後の注文主であるトラバルトと人文主義との関わりに言及し、本作が従来のエビタフやエビタフ画とは異なる、人文主義者特有の思想が反映されたものであることを明らかにした。</p> <p>第4章では、1519年にドイツで熱狂的な巡礼者を集めることとなった聖母のアイコン、《シェーネ・マリア》について考察する。アルトドルファーによる顕現する聖母の表現が、聖像批判が高まりつつあるドイツにおいて、批判的な</p>	
主査記載 氏名・印	宮下 規久朗

勢力に対抗する存在として制作されたことを分析した。人文主義者らは、帝国の国家事業において、「古代風の枠」に顕現する皇帝や、キリスト像を版画で制作させている。実際の帝国は政治的に不安定な状態にあったが、ドイツ国内の分裂状態を危惧した人文主義者らが、新しい聖人像を構想していた。「古代風の枠」に顕現する「聖ルカの聖母」は、そのような新しい信仰を創出するための試みであったと分析した。

第5章では、ツェルティスの著書『恋愛四書』が、ドイツの宗教画における風景描写発展のきっかけとなった可能性について考察している。同書は、自然と神の結びつきを、ドイツの風景の記述や挿絵によって具体的に表している。ドイツの宗教画においてよく描かれたのは、古代ゲルマン人にとつての聖樹であるオークと、当時キリスト教と結びつけられやすかったモミの木であることが分析された。このような樹木は、野人や聖人像とともに表され、救済や正しい信心の象徴として捉えられた。また聖母信仰の高まりによって、ドイツでは樹木と聖母の図像が流行している。「ドイツ的」自然を神の意志の表れと捉えるツェルティスの思想は、その後のドイツ人文主義者らに受け継がれ、樹木がドイツ人の象徴として強調されるようになった。

第6章では、ドイツの宗教画で表された樹木のイメージが、宗教改革をきっかけとして作品の主題として独立して描かれるようになったことで、アルトドルファーの風景画が成立するに至った経緯を分析した。15世紀のヴェネツィア派にみられる寓意的な風景表現がドイツに取り入れられた状況や、ハンス・ザックスの詩にみられる自然物の描写から、16世紀の「純粋な風景画」が成立するに至ったと考えられるとした。またアルトドルファーやフーバーの油彩・素描・版画による風景作品の具体的な分析から、「野生的な」樹木表現は、ドイツ的な風景に汎神論的な意味を見出したツェルティスの思想の影響を受けた人文主義者らにとつて需要があったのではないかと推察した。また宗教改革後も、ツェルティスの後継者たちによって、帝国におけるドイツの共属意識を表すモチーフとして、ドイツの自然観が引き継がれた点に言及した。

アルトドルファーの《エジプト逃避途上の休息》から《イッソスの戦い》に至るまで、その風景描写にはドイツ的自然が神意の表れとして捉えられ、次第に風景を捉える視点が、より宇宙的な、神に近い視点で表されるようになることを明らかにした。

本論文によって、アルトドルファーは、レーゲンスブルクやインゴルシュタット、ウィーンの知的サークルを通じて、生涯において人文主義的思想と密接に関わり、制作活動に反映していたという可能性が具体的に確認された。そして、アルトドルファーの描く異教のモチーフや、「ドイツ的」風景が描かれた聖母像、また、ドイツ特有の樹木が表された宗教画や風景画には、宗教改革期のドイツにおける人文主義の発展と、愛国主義の高まりが反映されていると結論付けた。

以上のように本論文は、アルトドルファーの作品の図像と意味について、図像学的・神学的・歴史的に仔細に考察し、コンラート・ツェルティスをはじめとする人文主義者の思想や文章と比較することでその描写やモチーフの意味を導くことに成功した労作であり、美術史的にも重要な意義を持つ内容であると判断したため、本論文に対し、博士(文学)を授与するに値するとの結論で一致した。

審査委員

区分	職名	氏名	区分	職名	氏名
主査	教授	宮下 規久朗	副査	准教授	増記 隆介
副査	教授	前川 修	副査	准教授	久山 雄甫
副査	東京大学 人文社会 系研究 科・教授	秋山 聡			